

ライフケアガーデン熱川 デイサービス

症 例 概 要 利用者：80代 男性 要介護1

病名 ： 不安神経症、糖尿病、肺がん

E県出身、港湾事業の会社に技術者として勤める。30歳で結婚してM県に家を構え、2女をもうけた。

2018年 妻が他界し独居となり、自宅に引きこもる生活を送る。

2020年2月 当施設近隣に住む長女が見かねて自宅に招き、伊豆にて同居を始める。

環境を変えたものの、一日の大半を自室で過ごす生活が続いていた。

2020年8月 下肢筋力低下のため他事業所の訪問リハビリ開始。

2020年9月 リハビリに拒否がみられたため訪問リハビリ中止。

2021年2月 外出機会や他者交流を目的として当施設デイサービスを利用開始。

ご利用者の得意を活かす取り組みによって、コミュニケーションと笑顔が生まれた事例。

内 容

他の地域から移り住んできたことやご本人の性格のためか、他のご利用者や職員とのコミュニケーションに極めて消極的な方でした。交流を図ろうと職員がお声掛けしても頷くのみで声を発さないことやリハビリ拒否、お迎えに伺っても利用を拒否する等、コミュニケーションや対応に苦慮する方でもありました。

職員はケアマネジャーの情報から、奥さんに先立たれ一人で生活されてきたことが不安神経症の原因であると考え、孤独感や疎外感がなくなるよう、穏やかで落ち着いた声掛けをご本人の側に寄り添い目を合わせて実施しました。同時に手先が器用であるという情報から工作をご案内しデイサービスでの時間を楽しんで頂いた結果、利用拒否がなくなるとともにリハビリに対して積極性を持つようになりました。

一方でコミュニケーションについては季節のイベント等にお誘いするも相変わらず消極的で、誰とも言葉をお交わさず黙々と工作をする日々が続いていました。

デイサービス職員はご利用者が工作の中でも特に切紙が得意であることから、壁へ飾る大きな切紙作品に挑戦して頂くこと、フロア内にご本人の作品スペースを設けることでコミュニケーションのきっかけ

けを作ろうとしました。提案を受けたご本人は当初、「恥ずかしい」「人に見せるものではない」と否定的な反応をみせますが、職員は諦めずご利用者の不安を解消し信頼関係が構築できるよう努めました。多くの人たちにご本人の素晴らしい作品を見て頂きたいことを伝え、道具の準備や完成までの段取り等、不安な部分は最大限サポートさせて頂くことをお約束しました。

職員の熱意ある対応にご本人は意欲的な表情をみせ大作への挑戦が開始、作業を進めていくうちに「今日はここをやりたい」「下地はこの色でどうか」等と自身の考えを職員に伝えたり意見を聞くようになり、陶芸家として活躍される娘さんのことを自慢げに話す、冗談を言って笑うようにもなりました。職員もまた、製作過程を通してコミュニケーションが生まれるよう、作品のこだわりを伺ったり感想をお伝えしてご本人が一人になる時間を作らないようにしました。

大きな作品が完成し他のご利用者の目に留まるようになると、「〇〇さんが作ったの?」「立派だねえ」と周りから話し掛けられ、ご利用者同士で会話が生まれるようになりました。そして、デイサービスフロアの一角に作品が飾られると自然と拍手が巻き起こり、ご本人は達成感と自信に溢れた笑顔を見せてくださいました。

後日、作成過程や飾った際の写真、作品の一部をファイリングしてご家族にプレゼントしたところ、お父さんが活躍されている姿とデイサービスでの和気藹々とした様子に大変喜ばれていました。

ご利用者の得意を活かした取り組みによってコミュニケーションと笑顔が生まれ、作業を通してやりがいと達成感よりご利用者本来のキラキラした姿に繋がった事例となります。